

認知行動における無意識的過程の研究

研究代表者 渡邊 克巳
(基幹理工学部 表現工学科 教授)

1. 研究課題

人間や情報システムの表層にありながら必ずしも意識されない潜在的な情報が、顕在的行動に与える影響の科学的解明と活用を目指した実験・調査研究を行う。認知科学では従来、自覚的な言語報告や身体動作の測定に重きが置かれてきたが、我々のこれまでの研究により、むしろ自覚的でない情報が人間の行動や意思決定に決定的な影響を持つことが分かってきた。そこで本研究では、過去10年以上にわたり、渡邊研究室で用いられてきた研究手法（身体動作、認知行動や自律神経応答の計測）を継承し、人間が五感情報を知覚・認知する際の注意過程、意思決定プロセス、行動への変換過程などを、潜在・顕在過程の両面から解明することを目的とする。特に、人間の無自覚的あるいは潜在的な反応が人間の自然な認知・行動に及ぼす影響を焦点に当て研究を行う。

2. 主な研究成果

当研究室での研究・研究成果は多岐にわたるが、今年度の主だった研究として、1) 社会認知に関する研究、2) 感情コミュニケーションに関する研究の2つがある。

1) 社会認知に関する研究：人間の自己概念や信念形成が、文化的な文脈や対人的要因とどのように関わるかを多角的に検討した。特に、食物刺激に対する自己優先効果について、日本人とイタリア人を対象とした比較実験を行い、自己は自文化・異文化いずれの食物とも連合可能でありつつも、自文化に特有の食物に対してより強い自己優先効果が生じることを示した。この結果は、自己概念が柔軟でありつつも、文化的に親和性の高い対象により強く結びつくことを示唆するものである (Dalmaso et al., 2026)。また、日本の子どもを対象とした宗教的信念の研究では、子どもの宗教的信念が、本人の共感的関心と親の宗教的信念の双方によって独立に予測されることを示し、宗教的信念の形成において社会的認知能力と家族内での縦断的伝達が重要であることを明らかにした (Ishii et al., 2025)。これらの研究は、自己や信念の形成が個人内の認知特性だけでなく、文化的・家庭的環境と密接に関連していることを示している。

2) 感情コミュニケーションに関する研究：人間が動物とどのように情動的・認知的に関わるかを検討した。犬の認知機能不全症候群 (CDS) に関連する老齢行動に対する飼い主の感情反応を調べた研究では、若い犬の飼い主が将来の介護状況を予期した際のネガティブ感情が、実際に高齢犬を介護している飼い主や介護経験者の報告よりも強いことが示され、将来の苦痛を過大評価する感情予測バイアスの存在が示唆された (Liu et al., 2025)。また、日本人観察者が犬の顔や目元の静止画像から犬の感情をどの程度読み取れるかを検討した研

究では、全顔条件・目元条件のいずれにおいてもチャンスレベルを上回る正答が得られ、特に全顔条件で成績が高かった一方、犬の飼育経験や人の目から感情を読む能力は全体成績を強く予測しないことが示された (Murata et al., 2025)。これらの成果は、感情コミュニケーション方略の選択や動物理解が、年齢、経験、予期と実体験の差といった要因により規定されることを示している。

そのほかにも複数の人間の認知行動過程における研究と外部発表を行っている (4. 研究業績参照)。

3. 共同研究者

草深あやね (理工学術院総合研究所・次席研究員)
近藤あき (理工学術院総合研究所・客員主任研究員)
白井理沙子 (理工学術院総合研究所・次席研究員)
杉本海里 (理工学術院・助手)
高尾沙希 (高等研究所・講師)
濱野友希 (理工学術院総合研究所・次席研究員)
ホン・シャオミン (高等研究所・講師)
山本浩輔 (理工学術院総合研究所・次席研究員)

4. 研究業績

4.1 学術論文

- Dalmaso, M., Vicovaro, M., Saito, T., & Watanabe, K. (2026). We are what we eat: Cross-cultural self-prioritization effects for food stimuli. *British Journal of Psychology*, *117*(1), 177–191. <https://doi.org/10.1111/bjop.70018>
- Ishii, T., Kobayashi, M., & Watanabe, K. (2025). Children's Religious Belief in Japan: Relationships With Empathy and Parental Belief. *Psychology of Religion and Spirituality*.
- Kato, N., Oshima, S., & Watanabe, K. (2025). Age differences in alcohol and music consumption among Japanese nonproblem drinkers. *Scientific Reports*, *15*(1), 43432. <https://doi.org/10.1038/s41598-025-26809-0>
- Liu, Y.-L., Murata, A., & Watanabe, K. (2025). Anticipated, experiencing, and recalled emotional responses to dog cognitive dysfunction syndrome in Japanese dog owners. *Human-Animal Interactions*, 0039. <https://doi.org/10.1079/hai.2025.0039>
- Misumi, K., Ueda, H., Nishiura, Y., & Watanabe, K. (2025). Detecting unnaturalness in biological motion with altered playback speeds. *Journal of Vision*, *25*(12), 9. <https://doi.org/10.1167/jov.25.12.9>
- Murata, A., Liu, Y.-L., & Watanabe, K. (2025). Reading emotions in dog eyes and faces by Japanese observers: A replication and extension study of Burza et al (2022). *Behavioural Processes*, *231*, 105246. <https://doi.org/10.1016/j.beproc.2025.105246>

4.2 総説・著書

- 該当なし

4.3 招待講演

- Watanabe, K. (2025). Implicit Behavioral/Emotional Contagion. Padova University, Padova, Italy.

4.4 受賞・表彰

- 杉本海里・中村航洋・尾野嘉邦・浅野正彦・渡邊克巳. (2025). 日本人政治家顔ステレオタイプの特徴と政治的意思決定への影響. 日本認知科学会第 42 回大会 大会発表賞, 早稲田大学.
- 向井香瑛・女川亮司・渡邊克巳. (2025). 運動の自動模倣の加齢的变化—20～70 代の成人を対象にした横断研究—. 日本スポーツ心理学会 最優秀論文賞.

4.5 学会および社会的活動

【展示・実験】

- Kasahara, S., Luscombe, N., Naruse, S., Shimizu, J., Kawamoto, Y., Taniguchi, S., & Watanabe, K. 「自然の共鳴、都市の残響 (Nature Resonance, Urban Echoes)」, OIST ソニックラボ, 沖縄科学技術大学院大学, 沖縄, 2025 年 9 月 1 日 - 9 月 28 日.

5. 研究活動の課題と展望

本プロジェクトでは、人間や情報システムの表層にありながら必ずしも意識されない潜在的な情報が、顕在的行動に与える影響の科学的解明と活用を目指している。今年度行った、各種の対面実験やオンライン研究の成果、設置した実験機材などを活用して、さらなる研究の実施を進め、国際的にインパクトのある研究成果を得るとともに、積極的にその発信（学術論文等）を進めていく。